

# 集

俳句フォーラム

2005年4月 第15号

## 双葉句会

簾越し

藤谷いきお

称名の滝反りかえり  
拝み観る簾越しに本と枕の置かれけり  
残鶯や昔流罪の島望み  
足裏ふと深夜の暈秋めくや  
小さき稲架今年も並び峡安堵

今ある命

清水さだひこ

秋彼岸供花無き墓に手を合わす  
故郷の山の湯に溶け秋心  
新蕎麦を慣れぬ手で打ち友と饗す  
亡母偲ぶ今ある命地震に耐え  
残る虫鳴くこと忘れ余震かな

冬鳥

重原爽美

秋の朝一縷の煙風知らず  
曲がりたる方へ向きかえ大根引く  
大根干す庇の影の来ぬ前に  
金賞を下げる菊にしばし佇つ  
一幹の大樹冬鳥はなさざる

櫓

牛木きよはる

刈り終えて三日見ぬ間に櫓伸ぶ  
役を退くその日を数う待春や  
人手なく我流で結ぶ冬囲い  
歳老いて高所恐怖の雪囲い  
予告なき訃報に寒き北陸路

冬銀河

永島よしお

蕉翁の詠みし佐渡なり冬銀河  
荒れ狂う師走の波や日本海  
枯蓮の水面に映る幾何模様  
凍し山地震に崩落生者死者  
冬の地震市民の安否気遣えり

秋 桜

鈴木恭子

何時見ても笑顔の遺影曼珠沙華  
「岸壁の母」の歌あり敬老日  
石臼が飛び石となり石露の花  
海よりの風にコスモス揺れどうし  
愚を諭す僧の説法秋彼岸

千歳飴

斉藤郁子

紅葉狩り声にぎやかに透きとおる  
秋天や飛行機雲は白き筋  
宮参り晴着の童女が千歳飴  
初雪やすずめ寄り添う軒下に  
木枯しや家路へ急ぐ衿立てて

野沢菜

阿彦ふみ

愛犬の逝きて淋しき秋の風  
鈴虫や夜毎を飽かずに鳴きとおす  
秋冷や地震に怯え躰を庇う  
白菊の大輪野菊そえ供華に  
娘に任せ漬ける野沢菜塩加減

神の留守

前川りよう

食卓へぼうぼうと焼く秋刀魚かな  
地の底のマグマ騒ぐや神の留守  
夜は青き光りあつめて石露の花  
鉢植をひとつ買い足し年用意  
黎明や射るごとと光る冬の星

川渡餅

笹川イツ子

秋霖や冷たくひかる蜘蛛の糸  
仲間らと山頂ひるげ草紅葉  
草むらに鬼灯赤い灯をともし  
川渡餅送って孫の便り待つ  
干柿のほどよき色の日和かな

花茗荷

宮本光子

花茗荷庭から採りて朝の椀  
黄昏や満天星紅葉垣根染む  
朝日のぼる庭の山茶花ぽつと咲く  
冬の地震揺れる大地にしがみつく  
風水と地震に怯えて年暮るる

台風

吉原すみ子

台風の過ぎて穂芒背を正す  
孫も子も甲斐路に遊び葡萄狩り  
台風に追い打ちかけて地震かな  
風雨すぎいま遠虹のでて初冬  
日溜の稲架にほどよき干大根

夜学の灯

東 暁雲

村に増える廃屋数多蔦紅葉  
激動の昭和を継ぎし夜学の灯  
一瞬の地震に崩落紅葉山  
地震避けて迷い入りくる冬の蝶  
神の留守地震の前兆海鳥の群れ

一句鑑賞

私の好きな一句

―「集」14号より―

◇藤谷いきお

激動の昭和継ぎて夜なべの灯

東 暁雲

細々と続く町工場に夜なべの灯りを見つけた。零細企業のみびしさと、素晴らしい作品を作る職人の腕と努力など、現代の工業事情を改めて思う。「夜なべ」という忘れかけた言葉が、いまだに俳句の季語に生きている。激動の昭和を生き抜いて来られた作者が垣間見て作られた、感性を味わいたい。

◇東 暁雲

墓参り人それぞれの滅び方

永島よしお

作者は「自由律」指向で、私の注目している句友である。現在議員として東奔西走、日常の活躍の中で、多くの作品を詠まれているが、時には「人の滅び方」などと、人生の哀感の詩をよむ。人間夫々の一生について省略の利いた、味わいのある叙法の一句である。

◇重原爽美

父の日を忘れられおり傘寿過ぎ

阿彦ふみ

母の日に対し、父の恩を感謝する日として日本でも父親にプレゼントをする風習が定着した。この句は傘寿の年代の方であろうか。傘寿を祝ってくれた子供達も今は孫や子を持つ親。傘寿を過ぎると、父として存在が遠くなり、一抹の寂しさを感じる。現実のわが身もまた同じであり、父として父の日を忘れ去られる寂しさが伝わる。

◇斎藤郁子

天井へ舞うもあり草を翔つ蛍

重原爽美

蛍の光が叢の低いところからふわっと立ち上がり、どんどん高いところへ舞っていった。「どこまでいくのだろう」とゆっくりみつけている作者。穏やかなひと時の情景がうかがえ、心安らぐ作品です。

◇吉原すみ子

水すまし五輪に肖り走るかな

斎藤郁子

きれいな水の流れがあつて良いですね。遠い日のことが浮かびました。さらさら流れる小川に、目高の群や水すまし……。忘れていた光景を沢山思い出しました。くるくる回る水すましを五輪になぞらえて、良い句だと思います。

◇牛木きよはる

かじか鳴く志賀の都を背景に

吉原すみ子

作者は志賀の旅をしたとき静かな宿で聞いたかじか蛙の声をいまでも思い出すという。涼風が頬を撫で、太陽が西へ傾く頃、蛙が美声を競い合うのは私も知っている。ある詩人が、河鹿蛙のひと鳴きは百万ドルに値すると評したとか。この作品は「かじか鳴く」美声にある。

◇笹川イツ子

いま団地昔は稲を刈りし跡

牛木きよはる

戦後、日本の食糧事情が余りにもめまぐるしく変化してきたのを感じます。ある時代には秋田八郎潟埋立による米の増産政策。それが青田刈り、減反政策と変り、いま団地に変貌。この作品には、そのような時代を生き抜いてきた奥深い思いが込められているのを感じました。

◇清水さだひこ

大花火開店祝いのアドバルン

笹川イツ子

大花火が炎の尾を引いて空に駆け上がり、大輪を開いて闇の底を照らした一瞬。街の佇まいの中で、アドバルンの開店祝の文字がくつきり目に入った。花火の

## 円の会

鋏

伊富貴耀堂

園児らと句の爺ちゃんや天高し  
酔芙蓉風が連れだす車椅子  
山茶花や猫かすがひに嫁姑  
終節は妣と合わせむ炉辺の歌  
おととひの髯剃り神と旅をした

一葉記念館

大村錦子

数え日や駄菓子壺に赤い飴  
凛々しさは仕入帳にも一葉忌  
一葉の声も聞きたし银杏散る  
一葉の小さき鬚や寒椿  
釣り銭を手渡す一葉年暮るる

山茶花

中川智恵子

山茶花や白い野良猫との別れ  
秋の蝶消えゆく空の真澄かな  
不器用は承知手袋編みにけり  
七三狛犬の目の細くなり  
水没の村霜月に入りにつけり

老象

中山まり

曼珠沙華木陰の中で自己主張  
浮島に漂うている花芒  
老象の鼻が探るや柿ひとつ  
行秋に病みて野鳥の羽音聞く  
宅急便友の育てし富士りんご

春立つと

平田公彦

まだ人が踏まぬが嬉し霜柱  
梅咲くや昨日も今日もなき日々を  
春立つと鷺真白に舞い上る  
豆を撒く声があちこち帰路の街  
沈丁の寒きに咲くも香は立たず

十一月 森田きよ

月曜は図書休館日秋刀魚買ふ  
小春日や大棧橋の汽笛鳴る  
ペルシアの敷物柿の落葉踏む  
あたたかき十一月や骨密度  
水仙やバザーに並ぶ犬二匹

紙ふぶき 山田邦彦

水鳥の一行にまた蛇行する  
冬うらら庭に二台の三輪車  
冬麗のかもめは空へ紙ふぶき  
冬の虹かつて榮えたる造船所  
家ごとにその家々のお正月

山茶花 山田桃子

泣いている貌に見えるよ柿落葉  
潮風に乗り赤とんぼ翅眩し  
豆腐屋のラッパ呼び止め秋夕映え  
人ちがいが軽い会釈や暮るる秋  
山茶花や自問自答の日々重ね

膝小僧 大山夏子

行く秋のころんでしまふ膝小僧  
雨乞いの神霧隠れ修験道  
のぞいてみたい頭脳ありけり柘榴の実  
落語家の旧居のあとや柿紅葉  
昨日も今日も末枯の坂上る

円の会句会報 — 抜粋 —

第五十回 平成16年10月2日

参加者・伊富貴耀堂、中川智恵子、森田きよ、若泉  
真樹、平田公彦、山田邦彦、山田桃子、森ゆみ子、中  
山まり、大山夏子、大村錦子（選句）

白もまた燃ゆる色なり曼珠沙華 智恵子  
（選）夏・き・公・ゆ・ま ・白い曼珠沙華が固ま  
って咲いているのは、はつと惹き付けられる。「燃ゆる

色なり」は心象的な表現。・私も観念的にとった。・気品と情熱を併せ持つ、曼珠沙華の美しさがよくでてい  
ると思う。・花をしつかりと見ている。・燃える色とは  
赤と決まっているのに、真つ赤な曼珠沙華の中では白  
が目立つのです。・「白もまた」が理窟では。

雨乞いの神山頂に霧がくれ

夏子

(選) き・耀・智・ゆ ・なんとなくも足りない  
気もするけれど、惹かれました。・雨乞いは人でなく神  
がするとは面白い発見(大げさか?)。霧がくれの季語  
がよく利いているが、一寸劇画めいた諧か。・雨乞いは  
夏の季語、霧がくれば秋の季語では? 雨乞いの神が  
雲がくれでなく、さつさと霧がくれしてしまった、と  
いうのが面白い。・あまり意味はわからない不思議な句  
ですが、言葉の面白さでとらせていただきました。  
しずしずと秋雨前線夢二の絵

きよ

(選) 耀・ま・桃・ゆ ・「しずしず」とは面白いが、  
夢二の絵がとってつけたよう。・「夢二」と「しずしず」  
とがぴったり合っています。そこに秋雨前線と現実が  
入るのが、面白い。・「しずしずと秋雨前線」という表  
現と、夢二の絵がぴったりと思えました。・雰囲気は伝  
わってきます。

園児らと句の爺ちゃんや天高し

耀堂

(選) 智・ゆ・桃 ・すきとおるような秋の空の下、

子供たちに囲まれた爺ちゃん。近頃は幼稚園児も句を  
作るといいます。好々爺と俳句とにぎやかな園児ら、  
これもいいですね。・のどかで微笑ましい。・幼子のく  
ったくのない無限の力は、老いて来る自分をどんなに  
明るくさせるか……。

椅子の向き変えて林檎の核をとる

真樹

(選) 耀 ・明るいほうへ向いたのだろうね。核は  
芯と書いた方が親切だ。・核がわからなかった。・椅  
子の向きを変えろということも、よくわからなかった。  
・あつ、そうか、椅子の向き変えは光を詠んでいる  
ね。納得。(以下略)

## 藤の会

石舞台

若泉真樹

柿の実や百済観音立ち賜ふ  
夢殿に耳置いてくる秋微雨  
秋茜飛鳥の古寺を見残せり  
政争の歴史を擦過する芒  
胸に染む色なき風の石舞台

晩冬

大山夏子

冬の蝶追うて浮世絵師の墓に  
落葉踏む乾きし音を蹀に  
茶の花や風のたわごと蘆花旧居  
残り柿咧酒をして朦朧と  
師走市の競りを背中に通り返け

激震

福山至遊

激震や新酒の話途切れけり  
勘違いの多き日しらすのおろし添え  
冬雲を吊り上げきれずクレール車  
朝寒や南部鉄瓶唸りだす  
立ち喰いの蕎麦の美味き日鷹渡る

秋茱萸

廣戸次郎

梨売りのおまけに添えし地下言葉  
秋茱萸を頬張りてゆくランドセル  
夜業明け車内に混じるスペイン語  
茶の花や紙面に光る和む記事  
単行本膝より落ちし日向ぼこ

今年酒

石川賢吾

限定てふ瓶のラベルや今年酒  
新蕎麦を打つ若い衆の力瘤  
爽やかや百歳にして紅を引く  
中腰に歌碑の裏読む秋日和  
綿虫や釈迦堂の香絶え間なし

奥多摩三句他

竹内太郎

奥多摩の光集めて銀杏散る  
返り咲く花や隣の無縁仏  
寒仕込み若き杜氏のとほる声  
城壁に溶け入る夕の冬桜  
爺さまが真ん中歩く酉の市

蔦紅葉

遠塚青嵐

脚ながき祭支度の茶髪の子  
鬼百合や山道くねり道路鏡  
スーパ一の試食の梨に異邦人  
長き夜の久闊の友一升瓶  
生垣に彩装うや蔦紅葉

男 岩

吉宇田知英子

天の川また見たくなり旅支度  
長雨や空見る親子運動会  
いちよう葉に肩たたかれて冬知らせ  
男岩冬のもみじをかぶせ置く  
東京のどんぐりこぶりがくれんぼ

秋 裕

伊藤浩子

野外ライブの夜更けて仰ぐ夏の月  
紡ぎ手に思いを馳せる秋裕  
透き通る青き瓶なり秋日射す  
来客の報せあわてて冬支度  
小春日や季節に疎し電気街

